

## 第2回 京都府教育振興プラン検討会議 概要

### 1 日 時

平成21年12月15日（火）午後1時30分～午後3時30分

### 2 場 所

京都府公館 第5会議室

### 3 出席者

委員 小寺座長、西岡副座長、芦田委員、片岡委員、ベッカー委員、原委員、  
藤井委員、山本委員（委員8名全員出席）

府教委 田原教育長、宮野教育次長、橋本管理部長、高熊指導部長、水江教育企画監、  
井関指導部理事、事務局（総務企画課）

### 4 内 容

京都府の教育の基本理念及び実現に向けた施策推進の視点と方向性

次第 教育長あいさつ  
委員紹介  
事務局説明（第1回検討会議の議論の概要について）  
意見交換・協議  
（1）京都府の教育の基本理念  
・目指すべき人間像  
・実現するために必要な力等  
（2）実現に向けた施策推進の視点と方向性

### 5 資 料

資料1 第1回京都府教育振興プラン検討会議での議論の概要

資料2 第2回検討会議の議論に向けて（論点メモ）

参考資料1 「目指すべき人間像」についてのこれまでの意見概要

参考資料2 教育理念の事例

=====

教育長あいさつ

第2回目の検討会議を開催したところ、委員の方々には、御多忙中のところ出席賜りお礼を申し上げます。本日は、第1回目の議論を踏まえ、京都府の教育の基本理念についてさらに議論を深めていただきたい。

計画策定を各地方公共団体の努力義務とする教育基本法の改正を受けて、他府県でも教育の振興に関する計画の策定が行われており、府県によってはユニークな独自の教育理念が打ち出されている。知徳体の調和といった教育の基本的なところは大切にしながらも、京都独自の京都らしい教育理念が出せればと考えている。ぜひ、皆様の英知をいただき、京都から全国に発信すべきものを打ち出していきたいと考えているので、よろしくお願ひしたい。

## 委員紹介

芦田委員（府市町村教育委員会連合会教育長部会世話人代表、長岡京市教育委員会教育長）

## 事務局説明

第1回検討会議の議論の概要について（資料1により説明）

## 意見交換・協議

(1)京都府の教育の基本理念について（資料2 - 1）

(2)実現に向けた施策推進の視点と方向性について（資料2 - 2）

（座長から議論の進め方について提案後、意見交換に入る。）

京都らしさを盛りこむとしたら、既に資料に挙げられている「京都の伝統と文化を愛する」ことに加え、インターナショナルな視点や地域力に優れていることなどがある。

今の日本で一番欠けているのは日本人としての誇り。激動の時代のリーダーのドラマが相次いで作られているのは偶然ではなく、日本人のあり方が問い直されていることの現れではないか。「京都の伝統と文化を愛する」ことが誇りに繋がる。家族やふるさとなどを愛する気持ちが薄れ、これらに誇りを持たなくなっていることは憂慮すべき。

外国の方を案内すると、京都の伝統や文化について一様に深い感銘を受けられている。京都はそれほどまでに世界に対して誇りを持てるところ。伝統は我々と関係ないところにあるのではなく、我々の人格と深く関わっている。子どもたちには京都人としての人格を持ってもらいたい。

2011年に京都で開催される国民文化祭のテーマは「心を整える～文化発心(ほっしん)」である。日本には、たとえば「いただきます」という言葉を発することによって次の行動に向かって心を整えていくという文化があり、そのための装置や伝統は、京都には特に豊富にある。

ある能楽師によると、京都で舞うときは30分で気持ちができるのに、東京では3倍の時間とエネルギーが必要だとのこと。京都には「1200年の空気感」が確かにある。

100年に一度と言われる厳しい経済状況の中で、世界中のパラダイムが変わっている今だからこそ、原点に立ち帰らなければならない。少しでも地域や社会の役に立とうという志の高い人を育てていきたい。

昔日本人が持っていたモラルや地域のふれあいがなくなっており、それをどう復活させ

るかが課題。命が輝く「仁」のところが求められている。

人間だけでなく小さな生き物も、死んでしまったら二度と戻らないことを教えこまなければいけない。「人を大切にする」より以前に「命を大切にする」ことが大前提。

調査の方法にもよるし、ゲームの影響だけとは限らないが、「人は死んでも生き返る」と考えている子どもは予想以上に多い。

昔は最期の時を病院ではなく家で迎えていた。子どもを含む家族による看護の日々が続いて、だんだんと灯が消えるように亡くなっていったもの。命が消えていくところに立ち会わないということも、子どもの命に対する考えに大きな影響を与えている。

多くの動植物が絶滅の危機にさらされ、そのうち人類も危うくなるかもしれないというのに、高速道路の無料化だの環境税導入延期だの、大人は「命より経済が大事」というメッセージばかり発している。大人が環境に優しくなることが必要だ。いくら「命を大切に」と言っても、大人が矛盾した態度をとり続ければ子どもは信じてくれない。

子どもに身につけさせたいことを、大人がちゃんと体現できているか考えるべきである。

日本人の自我は、個人ではなく、所属する社会やその社会との結びつき、自然との一体感などにあり、まわりと繋がりを持ち連携できてこそ自分の存在意義が感じられる。西洋風に個を強調しすぎるべきではない。また、「自我」や「自己」を必要以上に使うと、過度の権利感情に転じやすくなるおそれがあるので、留意する必要がある。

日本では周囲の目が気になるというが、それは社会との繋がりの中で責任ある行動が求められるということ。「包み込まれた個」という日本の伝統的な個のあり方は、むしろ世界に学んでもらいたいくらいだ。

「自尊心、自尊感情、自己肯定感」などの言葉を使うときは、自分と社会との関わりを念頭に置いておくべきである。根拠のない驕りではいけないが、「自分は期待されている、世の中に貢献できる」という意味での自己肯定感を持つことは重要。それに、「自分は大切な存在だ」という思いがあるからこそ、人のことも同じように大切にできる。

自尊の「尊」が何に由来するかが重要。一人一人の個に求めるだけでなく、人や社会との関わりの中に求めることも合せて考えることで、大きな力に繋がっていく。

絶望的な状況でも生き残れるのは、人生の目的を持つ者や、社会や人が自分に期待してくれているという思いを持つ者だけだという。人間が生きていくためには、人や社会との関わりが欠かせない。

他の案として、「偉人へのあこがれ」というのはどうか。偉人の功績を身近に感じられれば、自分もそうなりたいという心が膨らむ。京都は様々な分野の偉人を数多く輩出しているから、モデルも多種多様であり、「京都ならでは」にも繋がられる。

今の子どもたちに最も欠けているのはコミュニケーション能力ではないか。「社会や自然、人などと共生する」ためには、まずこれらとコミュニケーションをとる必要がある。

今の日本では誰も「怒らない」。しかし、集団の誰からも怒られないということを裏返せば、自分は集団から期待されていない・求められていないということである。

今は所属集団が学校くらいしかないので、行き詰まったときの逃げ場がない。自分が必要とされていると感じられるような、自尊心を高められるようなところもない。

小さな集団がなくなって、大きな集団の中に孤独な個人がぼつんぼつんという状態。大きな集団の中で自己を持ち続けるというのは本当に大変なことである。

今の中・高校生は将来自分が何になったらいいのか見えず、勉強する意味を見いだせない状態。「夢や希望を持っている」ためにはまず、未来を展望する力が必要である。

目指すべき人間像を実現するために必要なのは生涯学習能力である。

学力の中でも我々が目指すべきは「質の高い学力」である。実現するために必要な力として「人間力」が挙げられ、それが質の高い学力を下支えするのではないか。

学級崩壊が問題となりはじめた頃、選択制という考え方も広まってきた。しかし、「1には秀でていて残りの9はできない」ということで本当によかったのか。せめて高校くらいまでは、相手の気持ちを思いやれるとか自分の考えを伝えられるとか京都の伝統とか、基本的なことを広く学ばせる必要があるのではないか。

「全員一緒」がいい場合もあるが、それでは皆が窮屈な思いをすることもある。いつ頃からどういう分野で選択をさせるかというところは議論が分かれるところだが、優れた力を持つ子どもはその分野を伸ばしてやり、苦手な分野がある子どもはそれだけで落第生としないで別の分野で頑張れるようにしてやることは必要。

皆が同じことを学ぶことと、選択制にすることは、決して対立するものではない。基本がしっかりしていてこそその個性であり、その個性を伸ばしていくことも大切だ。

小学3年生に保育園で読み聞かせをさせると、子どもながらに恥をかかないようしっかり練習しているし、当日は自分の朗読に園児たちが目を輝かせて聞き入るのに感動している。こうした体験が、「自分にもできる」という自信を育てる。この自信を色々な方面に活かせるようにしてやりたい。

社会に貢献できる子どもを育てるためには、ツールやマニュアルなどをうまく使いながらバリエーションを持たせた指導をして、個人の能力と社会のニーズとのマッチングを

図ってやる必要がある。そうしなければ、どこに向かっても丸い、抜きんでた個性のない人間になってしまう。

人生の目的、生き甲斐を見いだしているかどうか測定するテストがあるが、これにより客観的なデータが得られるだけでなく、テストを継続して行うこと自体が、子どもたちに夢や希望、社会に貢献する気持ちを無意識のうちに持たせる方向付けになるのでは。

進路指導の狙いは受験指導ではなく、子どもに自らの生き方を考えさせ主体的に進路を選択させること。Y G性格検査など様々なツールを本人に使わせながら進路指導を行うこと自体が、自分自身のことを見つめさせる教育のよい機会となる。

小・中・高・大の区切りにとらわれず、6歳から22歳までの17年を見通して、成長の過程でいつどのような教育が必要なのかを考えるべき。たとえば小学校低学年の柔軟な頭には、選択よりも横並びの考え方で、人間として基本的なことを徹底的に教えこむ必要がある。古典の素読に取り組めば、その時は意味が分からなくても、体に染みこんだものは成長するにつれて人や自然とふれあう中で必ず理解できるようになる。そういう長期的な視点に立った教育論を打ち出すべき。

子どもたちに古典を暗誦させる取組が府教育局主体で行われている。頭が柔軟なうちに覚えたものは一生涯のもの。優れた古典にふれることも、脳を活性化することも、どちらも非常に意義がある。

「放課後子ども教室」で茶道が大人気となるなど、地域の人々の協力を得ながら伝統を体験し日本の良さを学ぶような体験教育が浸透しつつある。また、地域の人に「ふるさとガイド」として子どもたちを案内してもらう取組も進んでいる。地域の良さを学び、地域に対する誇りを感じてもらいたい。

イギリスでは、授業開始時に5分間の瞑想を行うことで、残り55分の授業に驚くほど集中できるようになったという。座禅を体験できる寺は、京都には沢山ある。急増しているADHDの子どもたちに落ち着く時間を与えてやることもできるのでは。

福笑いなど今の子どもに馴染みのない遊びでも、やらせてみるととても楽しんでいる。昔ながらの遊びには人を引きつける力がある。「質の高い学力」を考えるとき、すぐに役に立つ知識だけではなく、無駄のように見えるけれども人間としての力をつけるようなこと、たとえば伝統や文化を学ばせるべきだ。

「豊かな感性」というところを具体的に言うならば、様々なものごとにふれたときのしみじみとした感動「もののあわれ」を得られる人間になってほしい。そのためには、優れた古典や文化、年長者の話などにふれることが必要である。

日本の子どもは、駄目になったときや負けたときの訓練ができていない。小説を読めば色々な生き方を知ることができるのに、勉強は役に立つもの・小説などは無駄なもの

されてきたために、様々な生き方を知らず頭の中でのトレーニングができていないから、一度挫折すると立ち上がれなくなってしまう。

読書は強制できるものではないが、本には自分が経験できないことが沢山載っていることを伝えていきたい。「根本」や「本気」など、大事なものには「本」という文字が使われることは大きな示唆を含んでいる。

ただ「本を読め」というのではなく、図書館の環境を整備してやらなければならない。面白そうな本を揃え棚を整理し、図書館司書を置きボランティアによる読み聞かせを行うなど、図書館の環境を整備すれば、子どもの読書量はちゃんと増えてくる。

今のいじめは、集団から疎外された子どもが対象ではなく、友達のふりをしている中で起きているから、外からは見えない。また、成績が下がると同時に自尊感情も下がることが多いが、ネットいじめなどの要因はこうしたところにあるという説もある。子どもが持っている人間関係や子どもの内面で起きていることに目を向ける必要がある。

ときには親が守ってやることも必要だが、本人が自ら乗り越える力を身につけさせなければ、社会に出ても同じことの繰り返しになってしまう。

不登校は、子ども自身の問題だけではなく、学校が子どもをつなぎ止める魅力を失っていることもひとつの要因。子どもをとりまく環境にもどういった手を打っていくか考えなければならない。

教育の場は本来、学校だけでなく家庭や地域など様々なところ。今はそういうところの関係が希薄になっていて、コミュニケーションがとれない人間が増えている。人が人としてふれあえるような、学校とは別の小さな集団を育てていくべき。ある集団の中ではじかれたとき、これがセーフティネットになる。それに類するものがどんどんなくなってきており、京都ならではの地蔵盆の地域文化はこれからも大切にしたい。

一番小さな集団である家庭も、今は社会から浮いてしまっていたり、崩壊していたりする。子どもの自己実現を支える地域の力が必要だ。

若い保護者は沢山の子育ての悩みを抱えているが、一つの考え方しか知らないために失敗すればそれまで、という例をよく目にする。教育の専門的なことは専門家にお任せすればよいが、親がそうした基本的な知恵を持てるように支援する取組や、子どもたちも将来親になるという長い視野に立った取組を進めてほしい。

何もかも一つの学校だけでやろうとせずに、中・高の連携や高校同士の連携が行われているところはうまくいっている。